



奄美大島の海岸にみられる立神の文化地質学的意義

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 明彦 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/0002000083 |

奄美大島の海岸にみられる立神の文化地質学的意義

鈴木明彦

北海道教育大学札幌校地学研究室

Culture Geology of Tachigami Rocks on the Coast of Amami-Oshima Island, Japan

SUZUKI Akihiko

Department of Earth Science, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

ABSTRACT

Various Tachigami Rocks on the coast of Amami-Oshima Island in Kagoshima Prefecture are examined based on field geology and folklore literature. Ten geosites of the Island are described with their geology and chronostratigraphy, and determined geological attributions of Tachigami rocks. Based on chronostratigraphy, the horizons accompany with Tachigami rocks are divided into three ones, Late Jurassic-Early Cretaceous, Late Cretaceous and Eocene, in ascending order.

Yuwan Complex is represented by Nishikomi Tachigami Rock, which is sedimentary rocks in Late Jurassic horizon. Naon Complex is represented by Imazato, Shiba and Yoro Tachigami Rocks, which is sedimentary rocks in Early Cretaceous horizon. Amami Complex is characterized by Ankyaba, Negan, Naze and Ohama Tachigami Rocks and Tonbara Iwa Rocks, which are made of intrusions of volcanic rocks in Late Cretaceous horizon. Wano Formation (Eocene) is characterized by Setta Tachigami Rocks composed of sandstone and conglomerate. Various Tachigami Rocks are characterized by the sea stacks after differential weathering and erosion in coastal area. Folklore of Tachigami and Tonbara rocks in Amami-Oshima Island are mainly local origin but some folklore are related to the legend of Neriya-Kanaya.

[キーワード] 奄美大島, 立神, 奇岩, 伝説, 文化地質

I はじめに

奇岩は、珍しい形状や奇怪な形状をした岩石のことである。これらは節理・層理・断層などの面構造を反映した風化・浸食作用が作りだしたものである（友成，1998；ヤーハム，2012）。また，奇岩は神事や信仰の対象となり，様々な伝説・伝承が付与されたりするものもめずらしくない（須田，2011；池田，2018）。

奄美大島は，複雑な海岸線をもつため，海岸部には様々な奇岩が知られている（鹿児島県，1968）。これらは，奄美大島や奄美大島観光協会のウェブサイトでも紹介されているが，地質学的な背景については十分な記述はない。また，奄美大島の奇岩自体の地質やそれに関わる伝説・伝承について検討された例は乏しい（鈴木・圓谷，2021）。そこで海岸部の奇岩を代表する立神について，その地質環境を記載し，年代層序学的な意義を議論した。また，奇岩についての民俗学的な文献調査から，島内の伝説・伝承との関連を検討した。

II 地質概説

奄美大島は，奄美群島最大の島で，鹿児島県の南西部に位置する（図1）。外周約461km，面積約712km²の島で，最高点は標高694mの湯湾岳である（鹿児島県，1968，1983）。本島の中部～南部は，

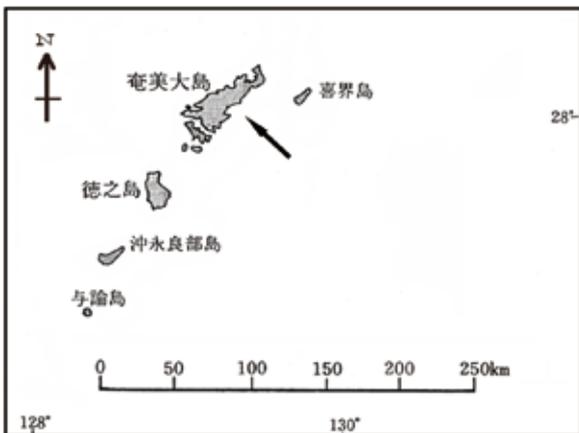


図1 奄美大島の位置.

一般に山地が海岸線までせまり，周囲は切り立った海食崖である。一方，北部の笠利半島では山地が低く段丘地形が発達しており，海岸はなだらかである（池田，1977）。奄美大島は黒潮の通過する地点で，黒潮本流が島の西側をおよそ100km付近で北東に向かって進んでいる。

奄美大島には，ジュラ紀～白亜紀前期の堆積岩コンプレックス（秩父帯）と白亜紀～新生代の堆積岩コンプレックス（四万十帯）が分布し，堆積岩コンプレックスの地表での露出は少ないが，基本的には西南日本の地質帯の延長部分であると考えられる（竹内，1994；図2）。なお，主に堆積岩からなり，複雑な地質構造や混在相が発達する，5万分の1縮尺の地図に表現できる規模の地質体を，堆積岩コンプレックス (sedimentary complex) と呼ぶ（竹内，1993）。

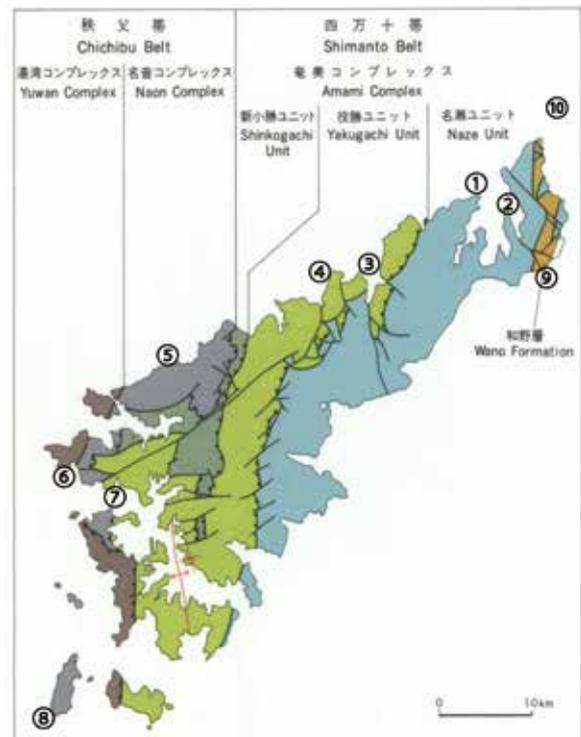


図2 奄美大島における立神の分布（竹内（1994）より引用）。主な立神の位置（①～⑩）。

奄美大島の地質構造発達史（竹内，1994）は，以下の通りである。(1) ジュラ紀後期～白亜紀前期：石炭紀から前期白亜紀に噴出あるいは堆積した玄武岩・石灰岩・チャート及び珪質泥岩等の海

洋性物質とジュラ紀後期から白亜紀前期に堆積した砂岩及び泥岩の陸源物質が順次付加し、湯湾コンプレックスと名音コンプレックスが形成された。(2) 白亜紀後期：砂岩・泥岩・酸性凝灰岩及び玄武岩等からなる奄美コンプレックスが形成された。この時構造的上位の部分は（新小勝ユニット）、より古い堆積岩コンプレックス（おそらく秩父帯の湯湾コンプレックスや名音コンプレックス）から岩塊が構造的に取り込まれた。(3) 古第三紀始新世：名瀬ユニット上に前弧海盆堆積物として和野層が堆積し、堆積岩コンプレックス中に火成岩類の貫入があった。(4) 第四紀更新世以後：何度かの隆起により、高・中及び低位段丘面の形成及び堆積物の堆積が起こった。

Ⅲ 立神各論

1 安木屋場立神：玄武岩（図2-①）

安木屋場立神は、龍郷町^{あんきやば}安木屋場にある（図3-1）。安木屋場港の北東方向に大きな三角形の岩が見える。安木屋場港の防波堤の先端にそびえ立つのが安木屋場立神である。

安木屋場立神は、高さがおよそ15mである。主に玄武岩溶岩からなり、見た目は淡緑色であるが、風化面は暗褐色となる。地質学的には、中生代白亜紀四万十帯の奄美コンプレックス名瀬ユニットという地質体に属する（竹内，1994）。この立神は白亜紀中頃（約1億年前）に、海底火山から噴出した玄武岩溶岩が固結したものである。侵食に

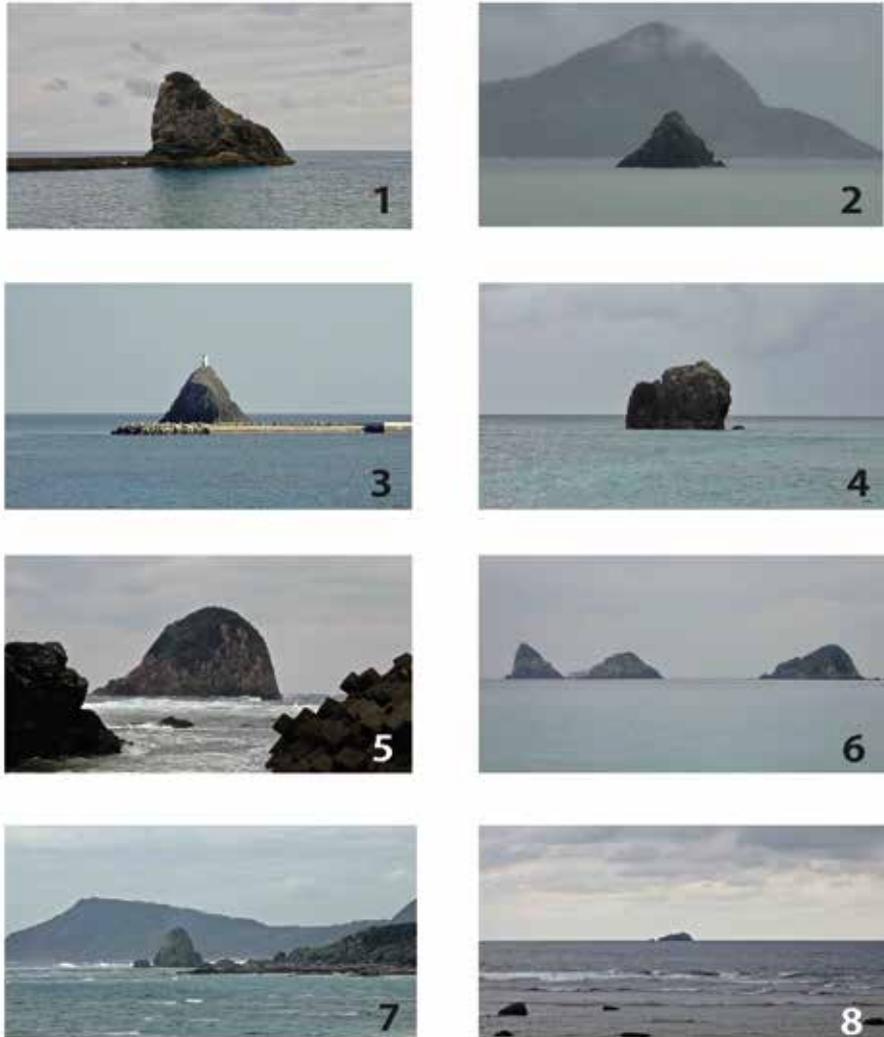


図3 奄美大島における主な立神。1. 安木屋場立神，2. ネガン立神，3. 名瀬立神，4. 大浜立神，5. 今里立神，6. 西古見立神，7. 節田立神，8. トンバラ。

強い玄武岩が、離れ岩となり、海上の立神となった。

2 ネガン立神：玄武岩 (図2-②)

ネガン立神は、奄美市北部^{うったばる}打田原地区にある(図3-2)。打田原地区にある打田原海岸は500mほど砂浜であり、その北端部は岩礁のネガン崎である。沖合にはネガン立神、浜辺には石ウシュキがある。ネガン崎周辺の岩礁は別名クサズィとよばれ、薬草のハマボウフウが一面に生えていたことに由来する(奄美遺産活用実行委員会, 2016)。

沖合にあるネガン立神は遠望しかできなかったため、浜辺の石ウシュキについて解説する。ネガンの石ウシュキは、高さがおよそ3mである。主に玄武岩溶岩からなり、外観は淡緑色だが、風化面は暗褐色となる。地質学的には、白亜紀四万十帯の奄美コンプレックス名瀬ユニットという地質体に属する(竹内, 1994)。この立神は白亜紀中頃に、海底火山から噴出した玄武岩溶岩が海中で移動・固結したものである。この玄武岩は緑色に変質しており、多数のクラックがみられる。

また、石ウシュキ近傍では、明瞭な枕状溶岩(Pillow lava)の断面が観察できた。外縁が淡褐色、内部が暗褐色の部分も認められ、数十cmの(枕)(Pillow)の形状がよく判る。枕状溶岩は、海底火山が噴出して、水中で固結した水冷破碎岩の一種である。侵食に強い玄武岩が離れ岩となり、ネガン立神や石ウシュキとなった。

3 名瀬立神：玄武岩 (図2-③)

名瀬立神は、奄美市名瀬地区にある高さ30m弱の離れ岩である(図3-3)。立神は主に玄武岩でできており、遠目からは暗褐色に見える。地質学的には、白亜紀の四万十帯奄美コンプレックスの役勝ユニットという地質体に属する(竹内, 1994)。

すなわち名瀬立神は白亜紀中頃に、海底火山から噴出した玄武岩の溶岩が固結したものである。その中で侵食に強い玄武岩が、海上に離れ岩をつくり、海上の立神となった。

4 大浜立神：玄武岩 (図2-④)

大浜立神は、奄美市大浜地区にある高さ15m弱

の離れ岩である(図3-4)。立神は、主に玄武岩でできており、遠目からは玄武岩は暗褐色である。これらは地質学的には、白亜紀の四万十帯奄美コンプレックスの役勝ユニットという地質体に属する(竹内, 1994)。

すなわち大浜立神は白亜紀中頃に、海底火山から噴出した玄武岩の溶岩が固結したものである。その中で侵食に強い玄武岩が、離れ岩となって、海上の立神となった。

5 今里立神：チャート (図2-⑤)

今里立神は、奄美大島大和村の今里地区にある高さ30メートル弱の離れ岩である(図3-5)。奄美市名瀬から、東シナ海側を南下すると、また今里港から海を眺めると、300mほど沖合にほぼ三角形の今里立神が見える。

今里立神は、高さが30mほどあるため、今里港からもよく見える。主に赤褐色のチャートから構成されている。一方、周辺の地質を観察すると、泥岩基質の混在岩からなり、この中に大小様々なチャート、玄武岩、石灰岩等の岩塊が含まれる。泥岩の一部には弱い剥離も認められた。地質学的には、中生代白亜紀前期秩父帯の名音コンプレックスという地質体に属する(竹内, 1993)。

これらの岩石は、約1億2000万年、当時の海溝に沈み込んだ海洋プレートによって形成された付加帯堆積物である。このうち立神をつくるチャートは、深海に溜まった放散虫遺骸(シリカ)に由来する珪質岩である。硬質の岩石なので、海岸の侵食にも十分耐え、現在のような形になった。

6 西古見立神：チャート (図2-⑥)

西古見立神は、奄美大島瀬戸内町の西古見地区にある。近隣の西古見マハンマ公園からは、東シナ海に屹立する三本の岩、西古見立神を眺めることができる(図3-6)。

西古見立神は、最大の岩が高さが20m近くある。これらは沖合側から、それぞれ沖の立神、中の立神、根の立神とよばれており、珪質堆積岩のチャートからなる。地質学的にみれば、中生代ジュラ紀後期の秩父帯湯湾コンプレックスという地質体に属する(竹内, 1993)。これらの立神の原岩は、

約1億5000万年に、当時の海溝に沈み込んだ海洋プレートによって形成された付加帯の混在堆積物である。要するに、深海に溜まったプランクトンを含んだ泥が固結した岩と解釈できる。

立神をつくるチャートは、硬質の岩石なので、海岸の侵食にも十分耐えたのであろう。また、初めは一枚岩だったが、侵食の微妙な過程で、三本の岩となり、現在のような形状を示している。

7 芝立神, 8 与路立神

芝立神は、加計呂麻島北部にある。また、与路立神は与路島南部にある(図2)。2019年1月海上より観察を試みたが、両地点とも天候不順により立神を観察できなかった。そこで、竹内(1994)に従って、概要のみを記述する。

芝立神の周辺地質は、泥岩基質の混在岩からなり、この中に大小様々なチャート、玄武岩等の岩塊が含まれる。また与路立神の周辺地質も、泥岩基質の混在岩からなり、同様に大小様々なチャート、玄武岩等の岩塊が含まれる。地質学的には、中生代白亜紀前期の秩父帯名音コンプレックスという地質体に属する(竹内, 1994)。このうち立神は、海岸の侵食に耐えうる硬質岩のチャートから構成されると推定したが、再調査が必要である。

9 節田立神：砂岩(図2-⑨)

節田立神は、奄美大島北部の節田地区にある高さ複数の岩塔である(図3-7)。奄美空港近くには砂浜海岸の節田海岸が広がっており、この海岸から見えるのが節田立神である。

節田立神は、節田集落南端にある高さ約20mの離れ岩である。この立神は、「節田タチガン」と呼ばれ、3つのタチガンからなる。大きい岩がウヤタチガン、中くらいの岩がクワタチガン、小さい岩がマアガタチガンと言われる。

節田立神は、主に硬質の砂岩、一部層状礫岩から構成される。これらの砂岩礫岩は、遠目には茶褐色に見える。地質学的には、古第三紀の和野層に所属する(Ishida, 1969; 竹内, 1994)。立神を作る岩石は古第三紀始新世(約5000万年前)の粗粒堆積物である。地質年代は、大型有孔虫化石(ヌムリテス属)の産出から明らかになった。

節田と和野の間の海岸は、通称「マザキ」と呼ばれ、この付近には複数の石切り場の跡がある。海岸には切り出されたままの巨石が、そのまま放置されている。この石は「節田石」や「マザキ石」と呼ばれ、かつては家の礎石、墓石、石碑等に利用されていた。

10 トンバラ：玄武岩(図2-⑩)

奄美大島では海岸からかなり離れた岩を、古くからトンバラとよんで、畏敬の対象としてきた。そこで奄美大島の「海上の岩」(小島)であるトンバラ岩を取り上げる。奄美大島最北端の笠利崎から東シナ海を見渡すと、北東方向に小さな島あるいは大きな岩が見える。これが岬の東北東約4kmの海上にあるトンバラ岩である(図3-8)。

このトンバラ岩(以下、トンバラ)は、標高が26mあり、北側には小さな岩礁もある。トンバラは、主に玄武岩でできており、層状の淡緑色凝灰質チャートから構成される。玄武岩溶岩は暗褐色だが、内部はむしろ淡緑色である。一方、凝灰質チャートは水平的に連続性が悪く、むしろレンズ状を示す。さらに地質学的には、白亜紀の四万十帯奄美コンプレックスの名瀬ユニットという地質体に属する(斎藤, 2008)。

トンバラは白亜紀中頃(約1億年前)に、海底火山から噴出した玄武岩溶岩とそれに伴う火山灰を含んだ珪質の泥が固結したもので、玄武岩もチャートも十分に硬い岩石になっている。その中でも侵食に強い玄武岩が、長年の波浪に耐えて海上のトンバラとなった。

なおトンバラには上陸できなかったが、同様の地質体は、笠利半島の北東海岸に分布する。そこで笠利崎の海岸に露出する玄武岩の野外観察を行った。この玄武岩は緑色に変質しており、多数のクラックをもつ硬質の岩石である。

IV 立神とトンバラ

神と人間は、普段は別の世界に住み分けているので、常世と現世をつなぐためには、両者の間に接点が必要となる。古代日本における彼岸と此岸

の接点のひとつが、〈磐座^{いわくら}〉とよばれる神がしろしめす石である。〈磐座^{いわくら}〉あるいは〈磐境^{いわさか}〉とよばれる原始的な祭祀の場には、巨石や巨岩が鎮座していることが多い（池田，2018）。

さらに石や岩そのものが神に崇め立てられると、〈石神〉や〈岩神〉として、信仰の対象ともなる（須田，2011）。そのような石の中で、特に注目されるものが、山中や森林で天に向かってそびえ立つ石である。これらは〈不動岩〉、〈天柱石〉、〈石の塔〉、〈メンヒル〉などよばれ、石そのものがすでに信仰対象である。山深い風景の中に突如出現したそびえ立つ巨石や巨岩は、古代の人々に強烈な印象を与えたであろう。

一方、内陸部だけではなく、海岸にも多くのそびえ立つ石がある。天を指すようにそびえ立ち、その堂々たる姿は神そのものにも見える。常に死の恐怖を抱いている船乗りや漁師たちが、この石を畏れまた敬い、航海や漁業の安全を祈るのは、むしろ自然のことといえよう。南日本では海辺の〈石神〉を〈立神〉（タチガミ、タテガミ）とよび、石神信仰では注目されるものである。特に奄美周辺では、〈立神〉をタチガミとよび、常世であるネリヤカナヤからやって来る神の寄る場所であるという。

タチガミは分布する地域によって、トンバラやトンガンとよばれたりする。トンバラやトンガンと、トンがつくのが特徴である。たとえば宮古の多良間島では、陸地にある岩もトンバラというが、これは大地にしっかりと根付いた岩のことであるという。つまり、海上のトンバラにおいても、海底に根っこがあって、そこからしっかりと生えている岩であることが重要である。このように沖縄では、いわゆるトン系呼称（トンバラ、トンガン）が多いことから、タチガミ呼称（タチガミ、タテガミ）はむしろヤマト系の言葉と考えられている（下野，1989）。

今回民俗学の文献調査の結果、奄美大島の奇岩には様々な伝説・伝承が残されていることが判明した（島尾ほか，1977）。初めに奄美大島誕生の伝説を取り上げる。次に島内に伝わる立神やトン

バラに関するいくつかの伝説を紹介する。

奄美創生を伝える開闢神話の舞台がアマンディ（奄美岳）である。神代の昔、アマミコとシニレク^{かいびやく}の二神がこの地に降り立ち、国引きをして奄美の地を創った。奄美という名は、この女神アマミコに由来する（島尾ほか，1977）。平坦な笠利平野の中心に位置するアマンディ（奄美岳）の頂上からは、奄美空港や喜界島が一望できる。

以下に「阿摩彌姑最初天降地」碑文を紹介する（奄美遺産活用実行委員会，2016）。「奄美開闢の神話（口碑）は、奄美創世神である女神「阿摩彌姑^{あまみ}」、男神「志仁礼久^{しにれく}」の二神がはじめてアマンディ（天孫嶽もしくは奄美嶽）に天降り、この島をおさめた後、島伝いに浦伝いに南下したと伝えている。古来この地は「アマンディ」と称され、村人から「かんだかい地」として深く尊崇されてきた。この「阿摩彌姑最初天降地」の碑は、明治34年、節田の住人朝仲明外八名が発起人となり村人に呼びかけて建設したものである。笠利町は昭和46年9月、由緒あるこの地を文化財に指定して永く保存することとし、道路その他周辺の整理補修工事を施行、昭和53年2月これを竣工した。アマンディは海拔130m、節田・平・和野の三集落の中核に位置し、東は沖合に喜界島をのぞみ、南は市崎・真崎・皆津崎を展望する景勝の地にあり、近くは節田に開闢二神を祭る「阿摩彌姑神社」がある。

まず今里立神に関する伝説を紹介する（下野，1989）。奄美大島大和村今里のムラの前の浜前方300mほどの位置に立神がある。今里では、旧暦二月に神を迎える「オムケ」と、旧暦四月に神を送る「オーホリ」という行事を行ない、それが立神とかかわっている。オムケのすすきの昼前、ノロを中心とした神女たちは立神を望む浜に出て薄を立て高盆にミキを供え二列に整列して座す。ノロが神口、ミキロと浜の祈願を唱え、その祈願のなかに立神が登場する。「立神ミカタの神様／波うち際の神様／海のなかの神様／五つのアマゼ（海と浜の境界）の入口を守る神様／七つのアマゼの入口を守る神様竜宮の神様／海の彼方の神様／今日はオムケでありますから／今里部落を安全

に守って下さい」。

当地では、オムケにはテルコ神が西風に乗ってやって来て、オーホリにはハエの風に乗っかりて帰るといわれており、オムケの前日、テルコ神がやって来て立神に碇をおろす音が聞こえるという伝承もある。「テルコ」とは、「ナルコ」と呼ばれる場合もあり、奄美大島の人びとが海の彼方にあると考えた理想郷で、沖縄でいうニライカナイに相当する。テルコ神は海の彼方の理想郷からこの世にやってきて幸いをもたらす神なのである。ここで注目すべきは、オムケの願いのなかで、立神は「立神ミカタの神様」と明確に神格化されているのに対して、伝承のなかでは、立神はテルコ神が碇をおろす場だと伝え、いわばテルコ神の依り代であることを説いていることである。

次に名瀬立神に関する伝説を紹介する（島尾ほか、1977）。名瀬の湾口に三角の岩が立っているが、これを立神とっている。奄美には立神があちこちにあるが、島人たちがこの岩に神を觀じ、島守りの岩として命名したことが伺える。

立神は、イキュン（海鳥の名）のねぐらになっているので、イキュントグラという。イキュンは眉目の美しい鳥で「蛾眉」という代わりに、島では「日眉ぬきよらさやイキュンぬ目眉」（眉の美しさはイキュンの眉のようだ）と形容している。

名瀬の中央に突き出た山がおがみ山。島人たちの心のよりどころで、御神山か、拝山かでにぎわった山であるが、名瀬の古い人たちは漢字とは関係なくうぐわん山とっていたようだ。「うがん山」か「うぐわん山」かはさておき、見ただけで神山としての山容をそなえている。大正の末頃まではこの山頂の草むらに小さな自然石があった。どんな神であったかはわからないが、ここが伊津部ノ口の神山であったことを考えれば、これがいわゆるイビであったのかと思われる。

この石をある中学生がいたずら半分を持ち帰ってきて、自分の家の床下に投げこんでおいた。ところがその晩から急に高熱を出した。ユタに占いをさせたら神石をそまつにあつかった神のたたりであるといわれ、高熱をおして母親と一緒にもと

の位置に返してきたら、熱もさがり病気もすぐに快復したという。

節田立神についての伝説を紹介する（島尾ほか、1977）。節田には形のいい立神がある。これは笠利町の文化財に指定されているが、ここを通るときには石を拾って立神に投げて通ったという。神たちへの手向けの石だったのか、鬼やらいの気持ちこめて投げたのか、もっと古老たちの言に耳を傾けてみる必要があるが、ここには人骨があったとも伝えられており、水葬との関連を考えてみるべきところかもしれない。またこの立神などは沖で漁る漁師たちにとってはソネの位置を判定する貴重なアテ（目印）でもあるという。

さらにトンバラについての伝説を紹介する（島尾ほか、1977）。用の沖六キロくらいのところトンバラ石という岩が見える。その岩については、こんな伝説がある。昔はこのトンバラ石まで潮が引いていたという。ある女が乳呑子を海岸に寝かせ潮干狩りに夢中になっているうちに潮が満ち、気がついたときには子どもは波にさらわれていなくなっていた。女は気も狂わんばかりになげき、「これからはトンバラまで潮は干るな」といって自分も海に身を投げて死んでしまった。それ以来トンバラまで潮が引かなくなったという。

V 考察

(1) 地質学的検討

奄美大島は、ジュラ紀～白亜紀前期の堆積岩コンプレックス（秩父帯）と白亜紀～新生代の堆積岩コンプレックス（四万十帯）から構成され、基本的には西南日本の地質帯の延長部分である（竹内、1994）。

東シナ海沿岸の秩父帯湯湾コンプレックスや名音コンプレックスは、堆積岩類から構成される（竹内、1994）。これらの中には硬質岩のチャートが含まれ、周りに比べて侵食に強いチャートが、残存した離れ岩となり、立神となった。これらには安木屋場立神、ネガン立神、名瀬立神、大浜立神及びトンバラが相当する（表1）。

表1 主な立神の名称とそれらの特徴.

| 名称 | 岩石種 | 地層 | 地質年代 | 海成浸食地形 | 文献 |
|-----------|------|--------------------|---------|--------|-----------|
| 1. 安木屋場立神 | 玄武岩 | 奄美コンプレックス (名瀬ユニット) | 白亜紀後期 | 離れ岩 | 竹内 (1994) |
| 2. ネガン立神 | 玄武岩 | 奄美コンプレックス (名瀬ユニット) | 白亜紀後期 | 離れ岩 | 竹内 (1994) |
| 3. 名瀬立神 | 玄武岩 | 奄美コンプレックス (役勝ユニット) | 白亜紀前-後期 | 離れ岩 | 竹内 (1994) |
| 4. 大浜立神 | 玄武岩 | 奄美コンプレックス (役勝ユニット) | 白亜紀前-後期 | 離れ岩 | 竹内 (1994) |
| 5. 今里立神 | チャート | 名音コンプレックス | 白亜紀前期 | 離れ岩 | 竹内 (1994) |
| 6. 西古見立神 | チャート | 湯湾コンプレックス | ジュラ紀後期 | 離れ岩 | 竹内 (1994) |
| 7. 芝立神 | チャート | 名音コンプレックス | 白亜紀前期 | 離れ岩 | 竹内 (1994) |
| 8. 与路立神 | チャート | 名音コンプレックス | 白亜紀前期 | 離れ岩 | 竹内 (1994) |
| 9. 節田立神 | 砂岩 | 和野層 | 古第三紀 | 離れ岩 | 竹内 (1994) |
| 10. トンバラ | 玄武岩 | 奄美コンプレックス (名瀬ユニット) | 白亜紀後期 | 小島 | 斎藤 (2008) |

一方、東シナ海沿岸の四万十帯奄美コンプレックスの名瀬ユニットや役勝ユニットは、堆積岩類から構成される (竹内, 1994)。これらの中には玄武岩溶岩がしばしば挟在され、周りに比べて侵食に強い玄武岩が、残存した離れ岩となり、これらが立神となった。これらには今里立神、西古見立神、芝立神、与路立神が相当する (表1)。

なお、古第三紀堆積岩から構成される太平洋海沿岸の古第三紀和野層では、硬質の砂岩礫岩互層が、海岸の離れ岩となって、節田立神となった。

また、奄美大島の海岸部は、氷河時代の寒冷期 (= 第四紀更新世後期の低海水準期) には海面が低下し、内陸に入り組んだ深い谷 (= 溺れ谷) を形成していた。この溺れ谷は小規模なりアス式海岸に相当する。その後海面が上昇すると、軟弱な沖積堆積物が溺れ谷を埋積した (池田, 1977)。この沖積堆積物から構成されているのが、主要河川の流域に認められる低位段丘面である。現在この低位段丘面は、稲作に適した水田になっている (中野・薬袋, 2017)。

奄美大島の白亜紀付加体堆積物には南北方向の多数の断層がある (竹内, 1994)。さらに南北方向の明瞭なりニアメント (線状構造) が認められる (井村, 2012)。リニアメントとは、空中写真で地表に認められる、直線的な線状地形のことである。このような南北方向の顕著なりニアメントによって、南または北方向に開いた狭長な小湾が

形成された。

また、東シナ海側には、黒潮本流が北上している。そのため立神周辺の海岸に打ち上げられ南方系漂着物は、海の神からの贈り物であり、まさしくこれらの到来が奄美のネリヤカナヤ伝説につながったのであろう (下野, 2013)。

(2) 民俗学的検討

初めに奄美大島の信仰について述べる。奄美大島は先史古代から日本本土と文化的に繋がりを持っていたものの、琉球文化からも深く影響を受け、島の信仰や行事は今でもそれらの伝統を反映している。琉球の信仰は、祖先崇拜を根底とし、日本土着の宗教である神道のように古代のアニミズム的なルーツを持っていた。この信仰における女性の霊的な優位性は、おそらく琉球の創世神話がアマミキヨという女神を中心に位置づけていたことによるものであろう。

奄美群島は鹿児島県に属するが、1609年薩摩侵攻以前は琉球王府が支配していたため、基層文化は琉球文化の影響を強く受けていた。現在の奄美文化の大きな特徴は、琉球文化と大和文化の二つの異なる文化が混在・変容している点にある。そのため、沖縄本島では見られない奄美独特の祭祀も存在する (松井・高橋, 2011)。

旧暦8月上旬から15日にかけて、奄美大島の各集落で行われるアラセツ行事は、今年の稲作の豊

年を祝い、来年の豊作を願う豊年祭行事である。中でも龍郷町の秋名集落で行われているアラセツ行事は、山と海から稲霊いなだまを招いて五穀豊穰に感謝し、来年の豊作を祈願する祭りとして、国の重要無形民俗文化財に指定されている（龍郷町，2019）。秋名のアラセツ行事は、水田や畑山の神々への豊作祈願であるショチョガマと、海の彼方の「ネリヤ」の神への祈願である平瀬マンカイに分けられる（下野，2005）。

このうち平瀬マンカイは、秋名海岸に露出する岩礁で行われる特異な祭事である（図4）。奄美の常世ネリヤカナヤから神を招く行事として、民俗学的にも注目されている（下野，2013）。



図4 秋名海岸で行われた平瀬マンカイ（2019年9月16日）。

一方、奄美大島に隣接する加計呂麻島西の立神については、次のような伝説がある。麦豊作の恵みを授けるべくネリヤの神は来訪され、村前の岬に接した立神に上陸滞在した。村人（神女達）の浜にこの招請に応じて村の岬角に上陸され、山の稜線の神道を馬で、そして村背後のオボツ山に着かれる（下野，1989）。

奄美大島周辺の集落については、加計呂麻島の14集落、奄美大島では瀬戸内と宇検村の6集落の調査によって、集落の空間概念が検討された（中野・葉袋，2017）。現地調査によって、ノロ祭祀がなくなった現在でも、カミヤマと呼ばれる聖山、ウガン山などと呼ばれる聖地、それらをつなぎ神が通ると言われるカミミチ、広場であるミヤー、カミ祭りを行う建物のアシャゲやトネヤなどの祭祀空間が残ることが分かり、これらを結び、集落

の空間を解析すると、「海岸線交差型」と「海岸線平行型」の2つに類型化できることが明らかにされた（図5）。

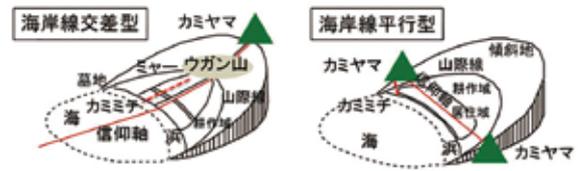


図5 奄美大島の祭祀空間の概念モデル（中野・葉袋（2016）より引用）。

以上、沖縄本島北部や加計呂麻島の伝承も参照してみると、南島における立神をめぐる信仰は以下の様な特徴をもつ。海の彼方からやってくる神は、まず岬角・湾口等にある柱状岩島（立神・トンバラ）に依り着く。次にムラのノロを中心とした神女集団が浜に出て、その柱状岩島（立神・トンバラ）を拝しながらムラに神を迎える。

この形が立神信仰の基本であり、現在信仰が衰退し、ノロ祭祀が消え、祭祀伝承さえも失い「立神」という名前だけが残っている場合でも、残存事例からかつての立神祭祀を根源的に考えることが可能である。この形は、古くは鹿児島においても同様だったといえる。枕崎の立神と山立神の関係は、加計呂麻島の立神とオボツ山の関係に酷似しており、立神は「神の跳び石」だったのである。海神の依り代としての立神は、常に景観のなかでの神々しさから「立神」という名を得て、そのまま神として処遇される場合が多い。依り代と神体との関係は、拝するものの心によっても流動しており、時代や祭りの種類によっても異なっている（野本，2006）。

類似の景観の中では、必ず同類の信仰や民俗が展開されていたはずだが、それを確かめる前に消失してしまう場合も多い。立神は、その形状から立脚・直立の「立」の意味をふくむことは確かであろうが、一方神顕現の「顕ち神」の意味もあり、その重層性にこそ景観にふさわしい重みがある。立神のある風景は、日本人が内在している海への

憧憬を刺激してやまないものであろう。

VI まとめ

- (1) 奄美大島にはジュラ紀，白亜紀，古第三紀，新第三紀，第四紀の堆積岩類や火成岩類が分布する。奄美群島では，奄美大島は最も地質の多様性に富んだ島である。島の海岸部では，火山岩類や堆積岩類の岩石が海岸に露出し，差別的風化・浸食作用を受けて様々な奇岩を作り出した。
- (2) 奄美大島の立神・トンバラの形成年代は，年代層序学的資料や放射年代測定値に基づいて，3層準に区分される。これらはジュラ紀後期～白亜紀前期の堆積岩コンプレックス，白亜紀後期の堆積岩コンプレックスおよび古第三紀の前弧海盆堆積物である。
- (3) 奄美大島の奇岩に関する伝説・伝承の多くは島に由来を持つが，ネリヤカナヤ伝説と関連するものも存在する。このような文化地質学なアプローチは，奄美大島におけるジオサイトの活用においても有意義である。

謝辞

北海道博物館の圓谷昂史学芸員には，文化地質学の情報をご教示いただいたので御礼申し上げます。また，本研究には日本学術振興会研究助成金（基盤研究（C）16K01002）を使用した。

引用文献

- 奄美遺産活用実行委員会 2016. ふるふる奄美. 136pp. 奄美遺産活用実行委員会，奄美.
- 池田安隆 1977. 奄美大島の海岸段丘と第四紀後期の地殻変動. 地学雑誌 86: 43-49.
- 池田清隆 2018. 磐座(いわくら)百選. 432pp. 出窓社，東京.
- Ishida, S. 1969. Wano Formation (Eocene) in Amami-Oshima, Ryukyu Islands, Japan. Jour. Geol. Soc. Japan, 75: 141-156.

- 井村隆介 2012. 地形・地質からみた2010年10月20-21日奄美大島豪雨による災害. 「2010年奄美豪雨災害の総合的調査研究」報告書: 1-4.
- 鹿児島県 1968. 奄美群島自然公園予定地基本調査. 海中公園センター調査報告 5: 1-382.
- 鹿児島県 1983. 土地分類基本調査「奄美大島南部」奄美群島地域. 24pp. 鹿児島県企画部，鹿児島.
- 中野夏貴・葉袋奈美子 2017. 奄美大島の集落形態と水害との関係性. 日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科 23: 157-164.
- 野本寛一 2006. 神と自然の景観論—信仰環境を読む. 296pp. 講談社，東京.
- 松井幸一・高橋誠一 2011. 聖地・妖怪分布からみる境界空間と住民意識—奄美大島龍郷町を事例として—. 関西大学東西学術研究所紀要 44: 243-272.
- 斎藤 真 2008. 奄美大島北東方，平瀬，トンバラ岩，サンドン岩の地質と帰属. 地質調査所研究報告, 59: 467-472.
- 島尾敏雄・島尾ミホ・田畑英勝 1977. 奄美の伝説. 286pp. 角川書店，東京.
- 下野敏見 1989. 東シナ海文化圏の民俗. 292pp. 未来社，東京.
- 下野敏見 2005. 奄美・トカラの伝統文化—祭りとノロ，生活. 452pp. 南方新社，鹿児島.
- 下野敏見 2013. 奄美諸島の民俗文化誌—南日本の民俗文化誌10. 442pp. 南方新社，鹿児島.
- 須田郡司 2011. 日本の聖なる石を訪ねて. 348pp. 祥伝社，東京.
- 鈴木明彦・圓谷昂史 2021. 平瀬マンカイ祭祀場の奄美大島秋名海岸の地形・地質学的特徴. 漂着物学会誌 19: 36-40.
- 竹内 誠 1993. 5万分の1地質図幅「湯湾地域の地質」. 地質調査所，東京.
- 竹内 誠 1994. 20万分の1地質図幅「奄美大島」. 地質調査所，東京.
- 龍郷町 2019. 秋名のアラセツ行事（シヨチヨガマ・平瀬マンカイ）. 4pp. 龍郷町，龍郷.
- 友成 才 (1998) 日本列島ロマンの旅 景勝・奇岩の地学探訪. 東洋館出版社，216pp.
- ヤーハム，ロバート (2012) 自然景観の謎（武田裕子訳）. ガイアブックス，東京，256pp.

[URL]

- 奄美大島 (<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp>)
- 奄美大島観光協会 (<https://www.north-hokkaido.com>)
- 日本の奇岩百景+ (https://www.web-gis.jp/GS_Kigan100/kigan100List.html.)

(札幌校教授)